

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき

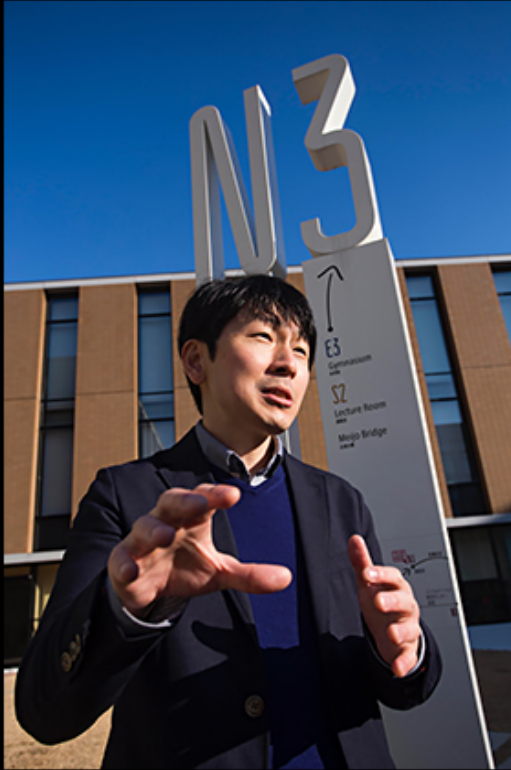


昭和62（1987）年4月に開学した神田外語大学は、従来の外国語教育を踏襲するのではなく、学問として異文化コミュニケーションを学ぶという、当時としては画期的なコンセプトを打ち出しました。開学10年後の平成10（1998）年、同大学に入学した人物に名城大学外国語学部の宮崎新准教授がいます。コミュニケーション教育を重視した当時の神田外語大学の様子からアメリカ留学時代の経験、大学でのコミュニケーション教育の重要性についてお聞きしました。

生まれは長野県の佐久市ですが、父の仕事の関係で、引っ越しがすごく多かったですね。小学校は2回転校し、中学高校を長野市で過ごして、大学時代は神田外語大学で学ぶのに千葉に出てきました。その後、アメリカのミシガン州デトロイトに留学するのですが、そこに7年いましたから、今のところミシガンが一番長いですね。どこが地元という意識があまりないのも僕の特徴かもしれません。

神田外語大学に進学したのは、比較的、英語の成績がよかったので、学校推薦がもらえたからです。英語がものすごく好きというわけでもなかったし、外国への憧れもなかった。外国語大学に入ったものの、どこか冷静に見ていた感じはしていましたね。だから、大学でもクラスで盛り上がるメンバーの中心にいたわけではないし、どちらかと言えば内向的で、人付き合いも苦手な方でした。

今、大学の教員としてさまざまな立場の学生の視点を大切にしています。外国語学部に入ってくる学生がみんな元気で物おじせず、ハツラツとしているとは限りません。目立つ学生がいる一方で、そうでない学生もいる。そこには敏感になるようにしています。こういう視点は大学時代の経験によるところが大きいのでしょうか。



学生当時（平成10（1998）年4月～平成14（2002）年3月）の神田外語大学を振り返ってみると、コミュニケーションの科目がたくさんあり、当時としては、ずいぶんと先進的な教育が行われていたと思います。コミュニケーション論、異文化コミュニケーション論、非言語コミュニケーション論など興味深い授業がたくさんありました。

ディベートやプレゼンテーションの授業もあったのですが、覚えているのは、まず日本語でディベートやプレゼンを行い、基準をクリアすると英語での表現ができたことです。あくまで母語（日本語）で論理的な思考の構築をすることが基本であるという考えが神田外語大学にはありました。その考えは妥当だと思います。最近の大学生は最初から英語でディベートやプレゼンをしなくてはならない状況にありますから、今思えば当時の神田外語大学で、日本語で考え、表現することを学べたことはとてもありがたいことでしたね。（1/8）

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき

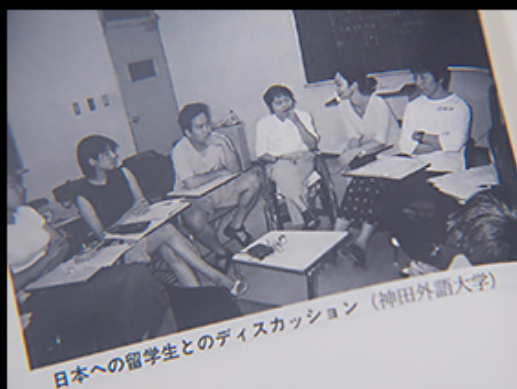


「あなたは、アメリカで研究しているかもしれません」  
発表の後、久米先生はそう言いました

印象深かったのは臼井先生（※1）や青沼先生（※2）の授業です。おふたりともレトリックが専門でしたが、論理的、批判的に物事を見て、考える姿勢を学びました。深夜のファミレスで友人たちと「死刑制度」についてディベートの準備に没頭していた思い出があります。1回目のディベートは死刑肯定側。その後すぐに死刑否定側に立つ準備を始める。みんなで「こんなこと続けたら精神的におかしくなるよね」と言っていました。でも、その学びは物事を見るうえでの振り幅を持たせてくれたと思います。

大学3年生の時は、親友たちと組んでいたバンドに臼井先生が参加してくれました。ライブを企画して、ステージの構成を考える。臼井先生と一緒に活動したことで、単に自分たちの自己満足で演奏するのではなく、どうすれば観客に満足してもらえるライブが作れるかを議論できました。教員である臼井先生とそんな時間を過ごせたのはとても貴重な体験でした。その結果として、ライブの後に友人たちが演奏やステージを評価してくれたことも、今になってみれば、教員として学生の前に立ち、授業をする下地になっています。

3年のゼミは異文化コミュニケーションの久米先生（※3）でした。翌年には立教大学に移られたので最後の年でした。1年間、ゼミで研究をして、まとめの発表をした時のことです。テーマは携帯電話によるコミュニケーションでした。僕が発表を終えると久米先生は、「とても興味深いですね。もしかすると、数年後、あなたはこういったテーマをアメリカで研究されているかもしれませんね」と言いました。当時の僕は留学なんて考えていなかったから、ただあざんとしました。でも不思議なもので、久米先生の言葉通りになっていくのです。4年は榎本先生（※4）がゼミの担当になり、3年の時のテーマを掘り下げていきました。



日本への留学生とのディスカッション（神田外語大学）



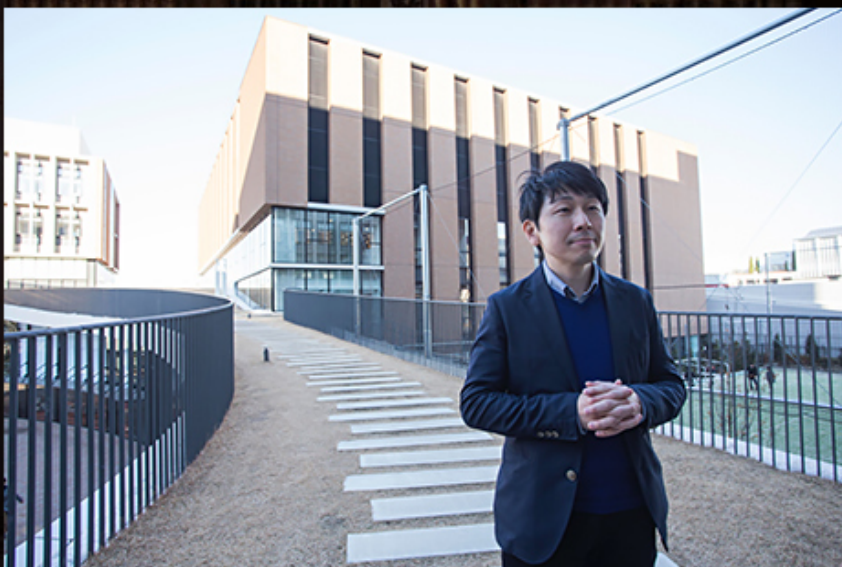
自分は会社組織にはなじめないというのは分かっていたので就職活動は積極的になれませんでした。その時、ふと大学1年の留学で起きたことを思い出したのです。

大学1年の冬、大学の語学研修プログラムでイギリスに留学したのですが、同じ家庭でホームステイをしていた先輩が亡くなりました。自らの命を絶ったのです。僕は翌日に別の家庭に移り、残りの数週間を過ごしました。留学を終えて成田空港に到着した時、学長を務めていた石井米雄先生が空港に出迎えに来てくれたのをよく覚えています。きっと、とても心配されていたのでしょう。(2/8)

1. 白井直人：元・神田外語大学英米語学科准教授（平成25（2013）年10月没）
2. 青沼智：元・神田外語大学国際コミュニケーション学科教授、現・津田塾大学学芸学部教授
3. 久米昭元：元・神田外語大学英米語学科教授／異文化コミュニケーション研究所副所長、元・立教大学異文化コミュニケーション学部教授
4. 榎本智子：元・神田外語大学英米語学科教授、現・関西大学外国語学部教授

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき

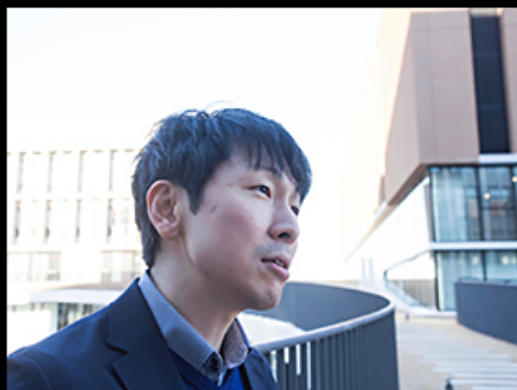


「学生の役に立つ存在になりたい」  
大学4年で見つけたアメリカ留学の道

初めての海外滞在、それも生活を始めた直後に同じホームステイ先の先輩が自殺するという出来事は僕に重大な影響をもたらしたことでした。でも僕は留学中も、そして帰国後も、何事もなく学生生活を送れた。それはきっと、ホストマザーやホストファザーをはじめ、あの時に周りにいた人の対応が適切だったからだと思います。誰も僕が置かれている状況をネガティブなものとは決め付けなかったのです。何か重大な事態が起きても周りにいる人間の対応によって、その出来事が人へ及ぼす影響は変わる。思春期の若い世代なら、なおさらだと感じました。

この経験がきっかけで、「学生のそばにいて、何か役に立つ存在になりたい」と思うようになりました。海外で学ぶ日本の若者を支援できると思い、留学をあっせんする企業を探したのですが、自分のイメージする仕事ができるようには思えませんでした。ならば、神田外語大学で学んできたコミュニケーション学をアメリカの大学で学び、いつか日本の大学で学生にコミュニケーション学を教えられるようになりたいと思ったのです。

もうひとつ、コミュニケーションに関する気づきもありました。先輩が自らの命を絶った本当の理由は分かりません。きっと精神的な病を患っていたのでしょう。でも、その事実を知ったところで、悲しみは癒えるわけはありません。





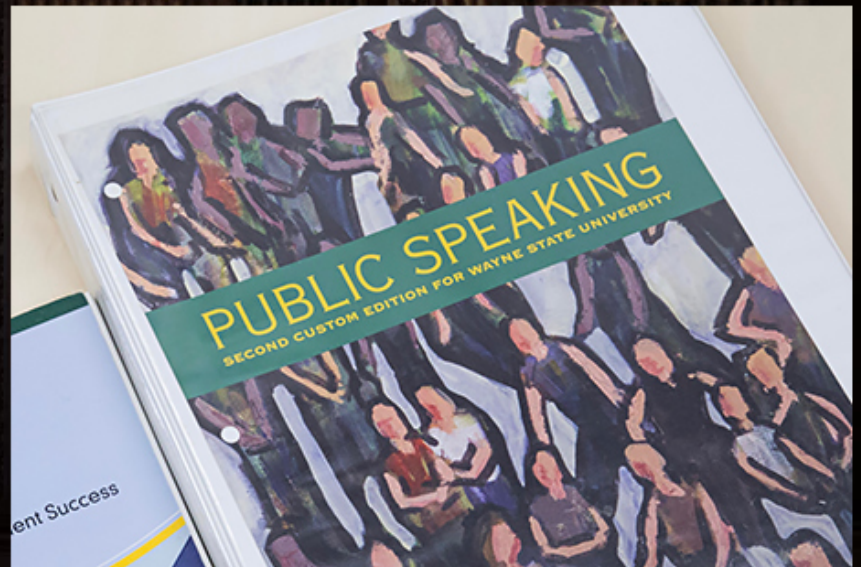
つまり、相手に関する事実を頭で理解できたからといって、必ずしも問題が解決するわけではないのです。一方で、内容を深く理解できなくても、相手の話を聴くだけで関係が深まることもあります。最近、「聴く」というコミュニケーションについて研究していますが、きっかけはあの時の経験だったと思います。

アメリカの留学先は、ミシガン州にあるウェイン州立大学（Wayne State University）でした。総合大学で幅広い分野が強かったのですが、スピーチコミュニケーションやレトリックなどの分野を中心としたコミュニケーション学も盛んでした。平成16（2004）年9月から授業が始まりました。

大学院での研究の中心はニューメディアとコミュニケーションの関係についてでした。僕が高校の時はポケベル全盛の時代。公衆電話でボタンを押してメッセージを送信していました。平成7（1995）年にウィンドウズ95が発売され爆発的なPCブームが訪れ、e-mailが普及していきました。その後、PHS、携帯電話が登場してきます。そういったメディアが急速に変化するなかで、人と人のコミュニケーションがどのように変化するかについて研究していきました。（3/8）

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき



### 教育と研究への情熱の傾け方の バランスを学んだ留学時代の教員経験

大学院ではアシスタントシップという制度があり、TA (Teaching Assistant) に選抜された大学院生は授業料と生活費が支給されます。TAは教員として学部生への教育を支援する役割を担います。留学の3年目、博士課程が始まるタイミングで僕はTAに選抜されました。その経済的な支援があったおかげで、大学院で学び続けられたのですが、英語で教える立場になったことで、きちんとした英語を話すために英語力を伸ばさざるをえないという状況になりました。

僕が担当した授業は「パブリック・スピーキング」でした。公の席で話すうえでの演説法で全学生必修の授業です。もちろん言語は英語です。アメリカ人という、はっきりと物を言うのでこの科目は得意と思われるかもしれませんが、必修だから仕方なく受けている学生もたくさんいます。課題も多くて、好きでもないスピーキングの授業を「なぜ英語のネイティブではないアジア人教員から教わらなくてはいけないのか」という不満を感じていた学生がいてもおかしくはありません。僕は英語との関係を改めて突きつけられたのです。



ただ、僕は大学での教育に携わりたくて留学していたので、授業にも自然と熱が入りました。何よりも、僕が教えたことで、パブリック・スピーキングという科目を、さらにはコミュニケーションという学問を嫌いにならないでほしかった。しっかりと準備して授業に臨みました。すると、驚いたことに、優秀なTAに与えられる「ティーチングアワード」を受賞できたのです。その年度は、延べ40人ほどの教員がパブリック・スピーキングを教えていたのですが、受賞したのは僕を含めて2、3人でした。学生からは「これだけ教えていることに情熱を持っている教員に出会ったのは初めてです」「非常に厳しかったけれど、とにかくフェアだった」という評価をもらいました。

大きな達成感を得た一方で、他の大学院生からは厳しい意見をもらいました。「僕ら大学院生の本分は研究。学部生への教育はバランスを考えるべき。研究をおろそかにして、教育にばかりに時間を使うべきかを考えた方がよい」と指摘されたのです。僕は好きなことはやり始めるとトコトンまで燃えてしまう性格です。それは嫌いではないし、大切に思っています。だから、周囲から「バランスを考えるべきだ」と言われた時はカッとなりました。

でも、正しいのは彼らです。大学院の目的は研究を完遂して、博士号を取得すること。そして、僕がいくら情熱をかけて授業の準備をしても、学生はすべて吸収できません。それは僕の自己満足であり、学生に押し付けるべきでない。留学中は教育と研究にどのように情熱をかけるか、そのバランスを学びました。(4/8)



異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき



神田外語大学の先生方から  
批判的な見方を学んだ米国での日々

アメリカで学んだことの、もうひとつは批判的に物事を捉える力を養ったことです。留学したウェイン州立大学は、お世話になった方々の合流点で、神田外語大学の臼井先生や青沼先生もこの大学の出身です。僕が留学していた1年目には、青沼先生はサバティカル（長期有給研究休暇）でウェイン州立大学に来ていました。現在、神田外語大学で教えている田島先生（※5）は僕がウェイン州立大学に留学していた時の同級生で共著の論文も数多くあります。先生方はレトリックやディベートの専門家、物事を批判的に見る力をお持ちでした。

例えば留学当初、National Communication Association (NCA) の国際学会でシカゴに行った時のことです。青沼先生と街を歩いているとアフリカ系の方が路上で太鼓を叩いていました。僕が何気なく「さすが、黒人ってリズム感がいいですね」と言うと、青沼先生から「育ちだよ」と返されました。「『黒人という人種はリズム感がよい』というのは固定的な見方だよ」と指摘されたのです。

僕自身の専門は対人コミュニケーションなのですが、神田外語大学在学中、そして留学時代の日常生活でレトリックの視点に触られたことで自分の研究に深みを持たせられたと思います。人と人の中で生じるコミュニケーションを考察するには、意見や立場の強さや弱さに惑わされず、どのような構造でコミュニケーションが成り立っているかを考え続けることが重要です。そうすることで、現象を批判的に考察せざるをえなくなるのです。留学中の先生方との関係を通じて、批判的に物事を見る力を養えたのは大きな収穫でした。





平成23（2011）年9月、日本に帰国し、神田外語大学で非常勤講師を務め、「日本語ディベート」と「英語プレゼンテーション」を教えました。日本人の学生に教えたのはこれが初めての経験でした。並行して、博士論文を仕上げ、平成24（2012）年5月、博士号を取得して、7年間に及ぶ留学が終了しました。

東京の大学にはコミュニケーション学の教員はたくさんいたので、東京以外のエリアで親しみがあった名古屋で職を探し、名古屋外国語大学外国語担当の専任講師に就きました。外国人教員とともに、英語で授業を行う教員です。英語のネイティブではない僕が、他のネイティブの教員とともに日本人の学生を教えるのです。学生たちは、日本人の僕から英語の授業を受けることなど想定していないし、不満に感じていたかもしれません。でも、僕が英語で話せることが分かると学生は教員としての僕を受け入れてくれるのです。改めて、英語の持つ特権的な力を感じるとともに、留学中から感じていた「言語と自己の関係性」を強く考えさせられましたね。

(5/8)

5. 田島慎朗：現・神田外語大学国際コミュニケーション学科准教授

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき



コミュニケーションをとりまく構造を知れば  
不要に個人を責める必要はない

平成28（2016）年4月、名城大学の外国語学部国際英語学科の准教授に就任しました。不思議な縁で、着任したナゴヤドーム前キャンパスには神田外語グループが運営をする「グローバルプラザ（※6）」がありました。また、平成29（2017）年の8月には神田外語大学の夏期集中講座で講師を務めました。名古屋にいながらにして、神田外語とのつながりはしっかりとあるようです。

日々の授業のなかで、学生たちに一番伝えたいと思っているのは、コミュニケーション学は単に相手と伝え合う技術を学ぶものではないということです。

まず自分がいる。そして相手がいる。そこに関係がある。相手はこう考えていると決めつけると、適切なコミュニケーションは成立しない。だから、まずは相手の話をしっかり聴いて、相手を知る。話を聴くだけで、関係が強くなる時もあります。

相手を知ると、自分がそこに何かを感じる。それは、自分を知ることの意味します。自分を知り、相手との関係を知ることで、何か霞（もや）がかかっていたようなことが晴れていくかもしれないし、晴れないかもしれない。良い、悪いではなく、相手とのコミュニケーションを構造的な側面から捉える。コミュニケーション学にはそんな視点があると思います。





この構造をうまく捉えられないと、不都合なことが起きた時に相手を責め、自分を責めてしまい、コミュニケーションが難しくなります。コミュニケーションが成立しない責任は個人ではなく、構造にあると考えれば、気を病む必要もないし、解決する方法だって見つけようがあります。例えば、学生が外国人と英語でうまく話せなかったとしても、僕は決して「君の英語力が低いからだ」なんて言いません。話した相手が話を聞こうとしなかったのかもしれないし、他に英語で話すことを妨げる構造的な原因があったかもしれないのです。

自分の感情や先入観に流されず、コミュニケーションを構造として見ていくという行為には訓練が必要です。ですから、学生に課題を与えても、僕自身は答えを出さないことがほとんどです。学生が自分で考え、「先生、こういうことでしょうか？」と聞いたとしても「君がそう思うのなら、そうじゃないの？ どうしてそう思う？」と問いかけます。学生は簡単に答えが出ないことに混乱し、考えることに疲労します。でも、そこまで考えると教員が想像できないような答えに気づくこともあるし、考え抜いたこと自体が次へのステップになります。(6/8)

6. 平成26(2014)年12月、神田外語大学と名城大学は「大学教育の協力に関する基本協定」を締結。名城大学は天白キャンパスおよびナゴヤドーム前キャンパスに自立学習支援施設「グローバルプラザ・M-SALC (Meijo-Self Access Learning Center)」を開設し、神田外語大学では同プラザを中心に行われる英語学習に対して、長年培ってきた語学教育に関するさまざまなノウハウを提供している。

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき



日常生活のなかで得られる「気づき」が  
物事への視点に選択肢を与えてくれる

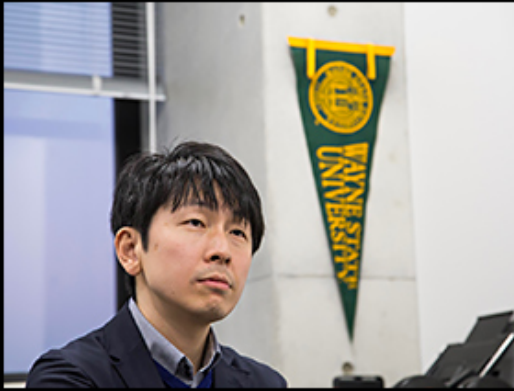
学生はこれからの人生でさまざまな立場に立つ可能性があります。疲れるまで悩み、考えるもうひとつの必要性は、他者との関係性で生じるコミュニケーションの多様な課題を少しでも自分自身で解決できる力をつけるためです。

英語を学ぶこともコミュニケーションにおける立場に作用します。例えば、「外国語学部で学んでいます」と説明した時に、「専攻の言語は？」と聞かれて、「英語です」と答えれば多くの人は「ああ、英語。勉強すれば役立つね」と納得してくれると思います。でも、英語以外の言語名を答えると、「なぜその言語を学んでいるの？」と問われることでしょう。この事例は「外国語を学ぶことは、すなわち英語を学ぶこと」であると思われる傾向が強いことを示しています。

もちろん、英語を学ぶことはコミュニケーションの幅を広げるうえで有効です。しかし、英語だけに価値を置きすぎて日本語や他の言語に関心を持たなくなると逆に視野を狭めかねません。海外は英語圏だけではありません。世界には多様な言語があり、多様な話者がいます。英語はそのひとつに過ぎないという客観性を持つことも大切なのです。

英語への偏りが過ぎると、英語の能力が高いことで自分は「強者」であると思ってしまうことがあります。しかし、人はコミュニケーションをする際に強者の側に立つときもあれば、弱者の側に立つこともあります。どちらの立場にもなりうるのです。学生たちにはコミュニケーションを構造的に見られるようになって、どのような状況に置かれても、自分や相手の立場を安易に決めつけない姿勢を養ってほしいのです。





僕は学生の固定的な考えを解きほぐそうとします。思考が柔軟になれば、そこに自発的な「気づき」が生まれます。その気づきは物事への視点に選択肢を与えてくれます。相手や生じている問題との距離感や位置関係を教えてくれます。その貴重な気づきは、日常的な体験でいくらかでも得る機会があるのです。

きっと僕自身が学生時代を通じて、強者の側に立つ人や権力を持った人のことを魅力的に思うことがあまりなかったのが、今、こういう視点で教育に臨んでいるのだと思います。僕は大学時代からコミュニケーションを学び、学生への教育を探求し続けてきました。その姿勢は変わっていません。でも、自分自身も経験とともに年齢を重ねていくなかで、社会的な立場も変わっていきます。そのなかでの葛藤はありますが、そこに自覚的にいることでさまざまな視点を保ち続けることができるのだと思います。

(7/8)

異文化理解教育の先駆者たち

第10回 宮崎新 名城大学准教授  
人生を拓くコミュニケーションへの気づき



コミュニケーションは、さまざまな立場の人の「声」に耳を傾ける手段となりうる

近年、人工知能（AI）の普及が進むにつれて、人間の職業が脅かされるのではといわれるようになりました。AIとは何か？ それは「学習・推論・判断といった人間の知能が持つ機能を備えたコンピューターシステム」を意味します。あくまでコンピューターシステムなのに、「人工知能」と呼ばれることで、どこか人間的なものを我々は感じてしまい、競争の対象として見てしまいます。

でも、人工知能は人間が競い合う相手ではありません。人間が相対するのはあくまで人間であり、コンピューターではありません。そして、そこにはコミュニケーションが介在します。コミュニケーションを学ぶことで自分たちの役割である人間同士の関係をより適切なものにしていけるのです。

今思えば、神田外語大学は本当に多くのきっかけをくれた場所でした。コミュニケーションに関する先進的な学びや異文化に触れる留学の機会。音楽などの学生活動を寛容に許してくれた自由な校風。そして、自然なかたちで導いてくれた先生方の存在。言葉にすると恥ずかしいですが、やはり神田外語大学から得たことは非常に大きかったと思います。

今、日本の大学ではグローバル化を合言葉に英語やコミュニケーションの教育が盛んに行われています。その背景には日本の大企業が世界での競争力を高めるために英語やコミュニケーションに長けた人材を必要としている事情があります。でも、この分野の学生にはさまざまな人生の道筋があるはずで、どうか、惑わされずに自分自身の学びの意義を探求してほしいと思います。



言葉は、そしてコミュニケーションは決して強い者の利益のためだけにあるのではありません。私たちの生活にとって身近なものであり、その時代を生きるさまざまな立場の人の「声」に耳を傾けるための手段となりうるのです。コミュニケーションを学ぶ学生たちには、ぜひその視点を持っていてほしいですね。(8/8)

#### 宮崎新（みやざきあらた）

昭和54（1979）年11月長野県佐久市に生まれる。平成10（1998）年4月神田外語大学外国語学部英米語学科に入学。平成14（2002）年3月に卒業、平成16（2004）年9月より米国のミシガン州ウェイン州立大学大学院コミュニケーション学研究科コミュニケーション学専攻に進学。平成24（2012）年5月、同大学で博士号を取得。帰国後は名古屋市に拠点を移し、名古屋外国語大学の専任講師を経て、現在、平成28（2016）年4月から名城大学外国語学部国際英語学科准教授として学生の指導にあたっている。